

## タケノコ採り 雄国五郎

細いアオキの幹をつかんではいるが 急坂な竹藪では滑落するばかりだ  
頭の上が明るくなつて 思いがけなく日差しがみえた  
登り切った平坦な藪の前に 荒壁の土蔵があつたのだ

野イチゴが左右に飛び散つて つまんでは口に入  
れる

こんなに薄味だったのだろうか

幼児の頃 ヤマ田

の畔で口にしたこ

とを思い出すが

どんな味だったか

記憶がない

色だつて 淡白な

赤より桑の実のほ

うがいい

それにしても

ハルさんの肌けた

胸の 薄赤い実

この水っぽさはな

んだらう



縄目が浮き出て、土塊がデコボコである  
表側に回つてみると 太い格子戸が開いていて  
中を覗く  
だしぬけに  
丸ごとのメロンが現れた  
飛び出るのを 待ちかねていたように  
白いブラウス姿だ  
「ハルちゃんじゃないか」  
メロン顔は眉間に皺を寄せて 腰に手を当てた  
こげ茶色のタケノコが腹に巻き付けてある  
さしずめ爆薬筒といったところだ  
「タケノコ持つて どこへ行くの」  
ハルさんは ようやく頬笑んだ  
「沖縄よ、普天間基地。岩国のほうがいいかしら」  
「そうだね、オバマさんみたいに、アラスカ経由で、  
ワシントンへ向かいますか」

タケノコ爆薬  
の上には真新  
しい白い前掛  
けをつけてい  
るが

下に並べたそ  
れが不格好に  
透けて見える  
これじゃあす  
ぐ見つかって  
しまうよ、と  
出かかった言  
葉をのみ込ん  
で

「沖繩へ行き  
ましよう、週末  
に梅雨明けらしいですよ。泊まりは『ヤマハはいぶ  
るむし』ですな」

ハルさんは 暗がりの壁際から表わら帽子を手に  
取ってきた  
外へ出ると

水溜りがあつて タケノコの残骸が溜まっていた  
葉きようも交じっているように



顔を背けて通つたものの  
土蔵を振り返らずにはいられなかった  
ハルさんはやりかねないと思つた  
今日にもあの格好で

沖繩へ飛ぶか  
もしれない  
同行すべきだ  
ろうか  
とりあえず  
タケノコをむ  
き身にして  
淡白な味を確  
かめてからだ  
不意に刺すよ  
うな雨粒が  
額を射てきた  
かろうじて  
手にしたタケ  
ノコを 握り  
しめる

